

氏 名 パッチャラポーン ケーオキッサダン  
**Patcharaporn Keawkitsadang**  
 学位(専攻分野) 博士 (人間・環境学)  
 学位記番号 人 博 第 277 号  
 学位授与の日付 平成 17 年 3 月 23 日  
 学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当  
 研究科・専攻 人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻  
 学位論文題目 身体変化の描写による感情表現  
 ——日本・タイの対照研究の観点から——

論文調査委員 (主査) 教授 齋藤 治之 教授 服部 文昭 助教授 河崎 靖

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文『身体変化の描写による感情表現—日本・タイの対照研究の観点から—』は、日本語の「身体変化の描写による感情表現」を中心として感情表現について考察し、この表現形式を軸に日本語とタイ語の比較対照を試みている。その際、それぞれの文化がもつ感情およびそれぞれの言語のもつ特性を明らかにすること、および、小学校低学年の子どもと小学校高学年の子どもが外界の対象を理解するプロセスを調査することを通して、両言語に見られる「身体変化の描写による感情表現」の各々に関する意味解釈の試みがなされている。

本論文は4つの章から構成されている。すなわち、第1章「感情表現の形式」、第2章「日本語とタイ語の感情を表わす身体変化の描写表現の比較」、第3章「児童期の感情表現に対する解釈」、第4章「結び」からなっている(別冊として、「日本語・タイ語の身体変化の描写による感情表現例の付録」・「アンケート調査の結果」が添えられている)。

まず序論では、今日に至るまでの先行研究における感情の解釈・感情理論について概観をした上で、本論文における感情、感情表現、「身体変化の描写による感情表現」の意味領域を規定することから始める。

ついで第1章では、感情を表わす表現について多角的に考察が加えられる。感情表現の形式には、非言語的感情表現と言語的感情表現というように大きく二つの形式が存在する。非言語的感情表現に関する研究は、心理学を中心として脳科学・生理学といった分野においてこれまで研究が多く行われてきた。一方、言語的感情表現に関する研究は、精神分析におけることばの記録・カウンセリングの研究・文学作品的な研究等はあるが、言語学的に体系だった論及は十分ではないと言わざるを得ない。この観点から本章では、主に言語的形式と感情表現との関係性について論及がなされている。

第2章は、本論文の対象である「身体変化の描写による感情表現」を、日本語・タイ語間で対照的に考察している。両言語間における、表現の傾向性および類似点・相違点を明らかにすることを目指し、また、「身体変化の描写による感情表現」の一つ一つの意味づけ・解釈の傾向について、言語内的要因および言語外的要因に基づき論考を進める。

第3章では、「身体変化の描写による感情表現」の意味、つまり、字義通りではない意味を解釈するプロセスに関する考察が試みられている。このような字義通りでない表現への解釈は通常10歳頃にならないと難しいと考えられているが、小学3年生と小学6年生を対象にしたアンケート調査に基づき、そのデータの分析により小学校低学年と小学校高学年との間に際だった差異があるのかどうかについて本章でアンケート結果の集計・分析がなされている。

最後の第4章では、先の第2章の異言語・文化間の対照考察、および、第3章の年齢層間の数量的分析の結果を基盤として、「身体変化の描写による感情表現」のモデル、「身体変化の描写による感情表現」の発達プロセスに関する解釈の可能性についての提唱がなされる。

本研究は、日本語とタイ語における「身体変化の描写による感情表現」を研究対象とし、両言語間を対照的視点から分析を行い、非言語的感情表現および言語的感情表現の関係性、両言語間に見られる共通点・相違点を見出すこと、併せて、言語発達論的な観点から小学校低学年・小学校高学年の「身体変化の描写による感情表現」に対する意味解釈を分析しその意

味解釈の変化過程を明らかにすることを目標としている。

この趣旨にしたがって、日本語・タイ語を対照分析した結果、両言語間に共通して見られることとして、「目」・「顔」・「胸」の描写による感情表現の頻度が高いこと、またその多くが感情経験あるいは非言語的感情表現との関係に基づくものであるということが判明した。片や、日本語はタイ語より感情を表わす表現の数が倍近く多いこと、そして細部の描写による感情表現が多く見られるということが相違点として挙げられる。「身体変化の描写による感情表現」の生成およびその意味解釈には、非言語的感情表現の生得的基盤・文化社会的感情の表象による文化的背景が大きく関わっていることがわかった。また、言語発達の観点から小学低学年・小学高学年の児童のケースでデータ分析した結果、従来言われていたこととは異なり、小学低学年の児童にも表現の二重性を認識し感情の意味解釈が十分に可能であることが明らかになった。

「身体変化の描写による感情表現」はメタ言語・メタ感情および個別言語の規則性・文化的要因ならびに個々人の感情経験の交差により成立し、その交差のしかたによって、日本・タイ、児童期前期・後期の子供および成人の間に差異が生じてくると考えられる。感情の表象の構築に関わる要因を大きく取り上げ言語的感情表現を分析・検討することにより、文化社会的側面および言語発達論的側面における感情表現のあり方に関して新しい研究を目指している。

### 論文審査の結果の要旨

本論文は、身体変化の描写による感情表現という新しい枠組みで感情表現全体を捉え、非言語的・言語的表現の両極をつなぐ立場からさまざまな感情表現を分析している。すなわち、文化的、社会的認識・評価に関わるメタ感情という概念を軸として、日本語・タイ語で、身体変化の描写による感情表現において見られる類似性および相違性は生理的基盤および文化・社会的基盤に基づき生じるという点を明らかにしようとしている。そして、それらの身体変化の描写による感情表現の意味解釈について発達論的に考察を試み、身体変化の描写による感情表現の成立ないし発達プロセスについてのモデルを提唱している。感情体験および感情表現は、その心的状態と身体変化への認識・評価によってメタ化されると考えられる。このメタ感情が人間の感情体験および感情表現を概念的に形成する。非言語的感情表現も言語的感情表現も、このメタ感情によって構成されるとみなされ、このような非言語的感情表現のパターンは言語的感情表現の生成の基本になると考えられる。本論文はこのように、感情表現、その認識・評価および非言語的感情表現と言語的感情表現は密接に関係しているという立場をとっている。

感情体験および感情表現はさまざまな手段を用いて行われる。日本人は無表情あるいは感情表現が豊かでないと言われるが、それもまた日本文化・社会において何らかの心的状態を伝えていると考えられる。このような伝達目的の意図は身体変化・ジェスチャーなどといった非言語的表現だけでなく言語を用いる感情表現にも現われる。例えば、日本語には、「怒りを押し殺す」という表現があるが、この表現には、感情に関わる理解・表示の一種のルールが見られ、文化・社会状況に合わせて感情表現のしかたを調整する、つまり、メタ感情による言語的感情表現であると考えられるという説明がなされる。身体変化の描写による感情表現によって、感情・身体変化・評価等の密接な関係性が改めて認識されることが認められ、この関係性を通し身体変化の描写による感情表現が一定のパターンになり、固定化し慣用句となる場合がある。また、メタ感情によって身体変化の描写による感情表現を基盤として他の概念領域と交差し比喩的表現を生み出すことがある。このように、言語的感情表現は、日本語・タイ語において擬音語・擬態語、感情語、身体変化の描写による感情表現、比喩表現といったさまざまな形式を通して表わされる。この論文では、身体変化の描写による感情表現は、メタ言語・メタ感情および個別言語の規則性・文化的要因ならびに個々人の感情経験の交差により成立し、その交差のしかたによって、日本・タイ、児童期前期・後期の子供および成人の間に差異が生じてくると主張し、感情の表象の構築に関わる要因を大きく取り上げ言語的感情表現を分析・検討することにより、文化社会的側面および言語発達論的側面における感情表現のあり方に関して新しい知見を示している点が評価される。

本研究は、日本語・タイ語両言語に共通して、感情を具現化して表示することが、言語的感情表現、特に身体変化の描写による感情表現の生成の基盤になっており、この場合、抽象的な表わし方から具体的な表わし方に置き換えることで、感情の概念が形成され、また、それを表わす表現が生み出されるモデルを提示している。併せて、それぞれの表現形成に文化社会的認識・評価が深く関わっていること、および、小学校低学年にも身体変化の描写による感情表現において感情の意味を

認識し解釈する作業が行われていることが確認された最初の本格的な研究で、この領域の研究にとっては大きな一歩であると言える。さらにさまざまな隣接諸分野における先行研究をも取り込んで、感情を表わす比喩との関係を分析し、より説得力のある身体・認識・心の関係の体系化を図っていきける発展性も有しており、高い評価に値する。

よって本論文は、博士（人間・環境学）の学位論文として十分に価値あるものと認める。また、平成17年1月14日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。